

[B年] 降誕前第8主日(2022年10月30日)**【旧約聖書日課】創世記9章8～17節**

8神はノアと彼の息子たちに言われた。

9「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。10あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。11わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」

12更に神は言われた。

「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。13すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。14わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、15わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。16雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」

17神はノアに言われた。

「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙5章12～21節

12このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。13律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪と認められないわけです。14しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです。15しかし、恵みの賜物は罪とは比較になりません。一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・

キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです。16この賜物は、罪を犯した一人によってもたらされたようなものではありません。裁きの場合、一つの罪でも有罪の判決が下されますが、恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下されるからです。17一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。18そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。19一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。20律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました。21こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです。

【福音書日課】ルカによる福音書11章33～41節

33「ともし火をともして、それを穴蔵の中や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。34あなたの体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい。濁っていれば、体も暗い。35だから、あなたの中にある光が消えていないか調べなさい。36あなたの全身が明るく、少しも暗いところがなければ、ちょうど、ともし火がその輝きであなたを照らすときのように、全身は輝いている。」

37イエスはこのように話しておられたとき、ファリサイ派の人から食事の招待を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた。38ところがその人は、イエスが食事の前にまず身を清められなかったのを見て、不審に思った。39主は言われた。「実に、あなたたちファリサイ派の人々は、杯や皿の外側はきれいにするが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている。40愚かな者たち、外側を造られた神は、内側もお造りになったではないか。41ただ、器の中にある物を人に施せ。そうすれば、あなたたちにはすべてのものが清くなる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

創世記 9章8～17節

8神はノアと、彼と共にいる息子たちに言われた。
 9「私は今、あなたがたと、その後が続く子孫と契約を立てる。10また、あなたがたと共にいるすべての生き物、すなわち、あなたがたと共にいる鳥、家畜、地のすべての獣と契約を立てる。箱舟を出したすべてのもの、地のすべての獣とである。11私はあなたがたと契約を立てる。すべての肉なるものが大洪水によって滅ぼされることはもはやない。洪水が地を滅ぼすことはもはやない。」12さらに神は言われた。「あなたがた、および、あなたがたと共にいるすべての生き物と、代々としえに私が立てる契約のしるしはこれである。13私は雲の中に私の虹〔直訳→弓〕を置いた。これが、私と地との契約のしるしとなる。14私が地の上に雲を起すとき、雲に虹が現れる。15その時、私は、あなたがたと、またすべての肉なる生き物と立てた契約を思い起す。大洪水がすべての肉なるものを滅ぼすことはもはやない。16雲に虹が現れるとき、私はそれを見て、神と地上のすべての肉なるあらゆる生き物との永遠の契約を思い起す。」17神はノアに言われた。「これが、私と地上のすべての肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

ローマの信徒への手紙 5章12～21節

12このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、すべての人に死が及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。13確かに、律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪と認められません。14しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。このアダムは来るべき方の雛型です。15しかし、恵みの賜物は過ちの場合とは異なります。一人の過ちによって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人に満ち溢れたのです。16この賜物は、一人の犯した罪の結果とは異なり、

裁きの場合、一つの過ちであっても、罪に定められますが、恵みの場合は、多くの過ちがあっても、義と認められるからです。17一人の過ちによって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人たちは、一人の人イエス・キリストを通して、命にあって支配するでしょう〔直訳→歩むためです〕。

18そこで、一人の過ちによってすべての人が罪に定められたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。19一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。20律法が入り込んで来たのは、過ちが増し加わるためでした。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ち溢れました。21こうして、罪が死によって支配したように、恵みも義によって支配し、私たちの主イエス・キリストを通して永遠の命へと導くのです。

ルカによる福音書 11章33～41節

33「灯をともして、それを穴蔵や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。34あなたの目は体の灯である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい。目が悪ければ、体も暗い。35だから、自分の中にある光が暗くならないように気をつけなさい。36あなたの全身が明るく、少しも暗い部分がなければ、ちょうど灯が輝いてあなたを照らすときのように、全体が輝くだろう。」

37イエスが話し終えると、ファリサイ派の人から食事の招待を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた。38ところがその人は、イエスが食事の前にまず身を清められなかったのを見て、驚いた〔別訳→不思議に思った〕。39主は言われた。「なるほど、あなたがたファリサイ派の人々は、杯や大皿の外側は清めるが、自分の内側は強欲と悪意で満ちている。40愚かな者たち、外側を造られた方は、内側もお造りになったではないか。41むしろ、できること〔別訳→内側にあるもの〕を施しとして与えなさい。そうすれば、あなたがたにはすべてのものが清くなる。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・10月30日「降誕前第8主日」の日課主題は「保存の契約(ノア)」。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、「ノア物語」の最後に描かれる「虹の契約」の場面の箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、「アダム=キリスト論」として知られる箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、群衆への教えを終えてファリサイ派の人の招きに応じて食事の席に着いた場面を伝える逸話の箇所。

旧約日課(創世記9章より)

・「創世記」は、正典「律法」の第一巻にして「聖書」全体の第一に置かれた文書で、「天地創成物語」(~11章)と「族長物語」(12章以下)によって構成されている。「天地創成物語」は、「原初史」とも呼ばれ、「族長物語」で扱われる以前の古い諸伝承をつなぎ合わせた構成となっている。「族長物語」は、アブラハムから始まる四代の家族の物語として構成されているが、第一代アブラハムと第三代ヤコブは明確に区分されており、両世代はただ第二代イサクを架け橋として接続されているだけである。日課箇所は、「天地創成物語」のクライマックスともいえる「ノアの洪水物語」の終結部で、「虹の契約」とも呼ばれる神の契約が、ノアの家族とその子孫および全被造物に対して結ばれる場面である。

・「ノアの洪水物語」伝承の起源には、メソポタミア文明で広く共有された「洪水伝承物語」が想定されている。古代オリエント世界でもっともよく知られ、広く流布していたとされる「洪水伝承物語」は、「ギルガメッシュ叙事詩」の一部として伝えられている。「ギルガメッシュ叙事詩」は、メソポタミア文明の初期、前2600年頃のシュメール王朝の王として実在したギルガメッシュの伝説的な物語として伝承され、オリエント世界で多言語に翻訳されながら受け継がれていたとされる。この「叙事詩」は、主人公ギルガメッシュの思想遍歴の旅として物語られるもので、「洪水伝承物語」も、ある時期に彼が師と仰いだ人物から聞いた伝承物語として記されており、二重の意味で史実性を曖昧にしている。メソポタミアは、チグリス川およびユーフラテス川など多くの河川の集まる流域として定住農耕生活を基盤とする都市国家が形成されていった地方である。同様に大河ナイル川流域に発展したエジプトが暦を確立すれば比較的安定した洪水予測が建てられた地方であったのに対して、メソポタミアは暦を確立してもなお不確実で予測不能な河川氾濫に悩まされ続けた地方であった。メソポタミア最下流域で早くに都市国家を形成したシュメール人は、シュメール語を表示する楔形文字を確立したが、この文字は周辺の他言語でも用いられ、後にフェニキア文字(いわゆるアルファベット文字)に取って替わられるまで、オリエント世界の共通文字として通用し続けた。

・「洪水物語」は、「天地創世物語」との類比性から、「再創造の物語」として位置づけられる。すなわち、「被造物の墮落」を憂いての「創造のやり直し」であるが、「ノアの洪水物語」においては、洪水のような方法による「創造のやり直し」を二度と行わないという神の宣言が置かれている(創8:21)。これによって、「被造物の墮落」に対する神の取りうる手段があらかじめ制約された形になり、「墮落した被造物」に対して神は限度を超えた「恵み」と「憐み」をもって向き合われるという「聖書」の基本的な「神」観念が基礎づけられている。

・日課箇所では、この「神」観念に基礎づけられた「永遠の契約」が告げられている。ここで注意すべきは、この「契約」が、「ノアの家族とその子孫=人類」のみならず「地上のすべての生き物」との間に結ばれたと告げられていることである。オリエントの宗教は、元来、都市国家として形成されるような地域や部族に結びついた限定的・排他的な「神」概念から出発したと考えられるが、この箇所に見られるのは、それらの限定性、排他性を超えた普遍性、包括性を有した「神」概念である。このような「神」概念は、バビロニア、アッシリア、後にはペルシアなど、いわゆる「世界帝国」的支配の時代以降に目覚めさせられたものと考えられる。・「契約のしるし」として提示される「虹(ケシュト)」の原義は「弓」。この描写には、「戦い」を終えた両軍が「弓」を置いて和睦を結ぶイメージが用いられている。

使徒書日課(ローマ5章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれている書簡文書で、パウロが未訪のローマ教会に宛てて訪問計画を伝え、訪問後に計画を立てているエスパニア伝道への協力を得るために書き送った書簡。エスパニア伝道への協力を呼び掛けるに際して、パウロは、自らのライフワークである「異邦人伝道」の神学的基礎づけを示すことによって、賛同を得ることを期待した。ローマの初期の教会共同体については、詳細がほとんど知られていないが、おそらくシリア・アンティオキアの教会共同体と同時期に同じような経緯で形成され、使徒ペトロの指導のもとで発展したものと考えられる。当時紀元1世紀の帝国首都ローマ市域は、人口100万人とも言われる大都市であったが、そこには、カエサル以来の皇帝の庇護を受けてきたユダヤ人が数多く居住し、一説には数万~十万人の規模でコミュニティを形成していたとされる。当然、多くの会堂が建設され、当時の多様なユダヤ教各派が混住していた。教会共同体は、そのような中に新しいユダヤ教分派として形成されたが、アンティオキア教会同様、異邦人信徒を積極的に受け入れる改革開放路線を取ることによって、正統民族主義的ユダヤ教各派からは忌避され始めていたと考えられる。パウロは、そのような教会に向けて、なおユダヤ教内に留まる立場から「聖書」に基づいたキリスト論と新しい「普遍的救済」論を提示しているのである。

・日課箇所には、「アダム=キリスト論」と呼ばれるパウロの論が提示されている。「創世記」の創造物語に描かれる「最初の人アダム」と「キリスト」を類比的に取り上げることによって、「キリスト」による救済を基礎づけている。

福音書日課(ルカ 11 章より)

・日課箇所は、群衆に向けて語られた一連の教えの終わりに置かれた「ともし火のたとえ」と、それに続く場面として描かれる、ファリサイ派の人からイエスが食事に招かれ、応じる逸話の箇所となる。「ともし火のたとえ」は、「マタイ福音書」だけが異なる文脈で伝えている(マタイ 5:15、同 6:22~23)。「ファリサイ派の招待」の逸話は、共観福音書各書が異なる再編集を伴って伝えている。日課箇所中、38 節は、「マタイ」および「マルコ」では、「昔の人の言い伝え」と呼ばれる比較的大きな逸話伝承で扱われる出来事であるが、「ルカ」は異なる文脈に置いている。「ルカ」は、「マルコ」同様、「ファリサイ派」に対して受容的に描く傾向がある。
 ・41 節は、実践行為が人の内面形成に影響を与え、枠組みを与えるという発想。「信仰」と「行い」の関係を考える上で、この発想は十分に考慮する必要がある。

来週の誕生日 (10月30日~11月5日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-224 番「われらの神、くすしき主よ」(= I-73 番「くすしきかみ、たえなる主よ」)は、17 世紀ドイツ改革派牧師で敬虔派の影響を受けて讃美歌創作をした J.ネアンダーの作詞。曲は、この歌詞を自身の歌集で発表する際にネアンダー自身が指定して掲載した曲(作曲者不詳。ネアンダーの自作?)。
- ・21-200 番「小さいひつじが」(= 355 番)は、19 世紀英国で金物商を営みながら讃美歌創作を続けたアルバート・ミッドレーンの作詞。曲は、ロンドンで活動したイタリア人作曲家サルヴァトーレ・フェレッティの原曲から。
- ・21-401 番「しもべらよ、み声きけ」(= I 224 番「勝利の主イエスの名と」)は、C.ウェスレーの作詞。「讃美歌 21」では原歌詞に即して全面的に改訳されている。曲は、ドイツ民謡から取られてカトリック聖歌集(1765 年版)で用いられるようになったものを転用。
- ・21-73 番「主よ、平和のうちに」は、19-20 世紀ドイツの讃美歌学者シュピッタが 16 世紀の宗教詩人 J.エングリッシュの「シメオンの讃歌」に基づく詩を改作した歌詞。曲は、ルターと同時代のドミニコ会修道士オルガニストのダハシュタインの作曲。22 番も作曲。

21-224「われらの神、くすしき主よ」

Wunderbarer König

1. Wunderbarer König, Herrscher von uns allen, / laß dir unser Lob gefallen; / Deines Vaters Güte hast du lassen triefen, / ob wir schon von dir wegliefen: / Hilf uns noch, / stärk uns doch; / laß die Zungen singen / laß die Stimmen klingen.
2. Himmel, lobe prächtig deines Schöpfers Thaten, / mehr als aller Menschen Staaten. / Großes Licht der Sonne, schieße deine Strahlen, / die das große Rund bemalen; / lobet gern, / Mond und Stern, / seid bereit zu ehren / einen solchen Herren!

3. O du meine Seele, singe fröhlich, singe! / singe deine Glaubenslieder; / was den odem holet, jauchze, preise, klinge; / wirf dich in den Staub darnieder! / Er ist Gott / Zebaoth! / Er nur ist zu loben, / Hier und ewig droben.
4. Hallelujah bringe, wer den Herren kennet, / wer den Herren Jesum liebet; / Hallelujah singe, welcher Christum nennet, / sich von Herzen ihm ergiebet. / O wohl dir! / glaube mir: / endlich wirst du droben / ohne Sünd ihn loben!

21-200「小さいひつじが」

A Little Lamb Went Straying

1. A little lamb went straying / Among the hills one day, / And left its faithful shepherd / Because it loved to stray; / And while the sun shone brightly, / It knew no thought of fear, / For flowers around were blooming / And fragrant was the air.
2. But night came over quickly, / The hollow breezes blew - / The sun soon ceased its shining, / All dark and dismal grew; / The little lamb stood bleating, / As well indeed it might, / So far from home and shepherd, / And on so dark a night.
3. But ah! the faithful shepherd, / Soon missed the little thing, / And onward went to seek it, / Safe home again to bring: / He sought on hill, in valley, / And called it by its name - / He sought, nor ceased his seeking, / Until he found his lamb.
4. His strong arms gently lifted / The lamb against his breast, / And as he bore it homeward / He fondly it caressed; / The little lamb was happy / To find itself secure; / And happy, too, the shepherd, / Because his lamb he bore.
5. And won't you love the Shepherd, / So gentle and so kind, / Who came in brightest glory / His lambs on earth to find! / To make them, oh, so happy, / Rejoicing in His love, / Till every lamb be gathered / Safe in His home above.

21-401「しもべらよ、み声きけ」

Ye Servants of God, Your Master Proclaim

1. You servants of God, your Master proclaim, / and publish abroad his wonderful name; / the name all-victorious of Jesus extol; / his kingdom is glorious and rules over all.
2. God rules in the height, almighty to save; / though hid from our sight, his presence we have; / the great congregation his triumph shall sing, / ascribing salvation to Jesus our King.
3. "Salvation to God, who sits on the throne!" / let all cry aloud, and honor the Son; / the praises of Jesus the angels proclaim, / fall down on their faces and worship the Lamb.
4. Then let us adore and give him his right: / all glory and power, all wisdom and might, / all honor and blessing with angels above / and thanks never ceasing for infinite love.

21-73「主よ、平和のうちに」

Im Frieden dein, o Herre mein

1. Im Frieden dein, o Herre mein, / lass ziehn mich meine Straßen. / Wie mir dein Mund gegeben kund, / schenkst Gnad du ohne Maßen, / hast mein Gesicht das sel'ge Licht, / den Heiland schauen lassen.
2. Mir armem Gast bereitet hast / das reiche Mahl der Gnaden. / Das Lebensbrot stillt Hungers Not / heilt meiner Seele Schaden. / Ob solchem Gut jauchzt Sinn und Mut / mit allen, die geladen.
3. O Herr, verleihe, dass Lieb und Treu / in dir uns all verbinden, / dass Hand und Mund zu jeder Stund / dein Freundlichkeit verkünden, / bis nach der Zeit den Platz bereit / an deinem Tisch wir finden.